現代韓国における高麗人蔘と優越的プラシーボ効果

――ナショナリズム化した「身土不二」の観点から――

林　　史　樹

0. はじめに

東洋医学は根強い人気を誇り、ブームもほとんど絶え間なく訪れる。自治医科大学教授の村松慎一［2008：1］によれば、東洋医学が人気であるのは、「体に優しい」や「副作用がない」といったイメージからくる。そのような東洋医学に対する信奉がもっとも強い場所として知られるのは韓国である。たとえば、『週刊エコノミスト』（2012 年 8 月 7 日号）によれば、日本の専門医が 2396 名、中国が約 40 万人に対し、韓国は 2 万 1998 名となっている。各国家の人口を 1 億 3000 万人、14 億人、5000 万人とすれば、人口 10 万人あたりの専門医数は、それぞれ 1.8 人、28.5 人、44 人となる。各国における伝統医薬品の市場規模は 1273 億円、2 兆円以上、約 5000 億円であり、人口規模で約 2.6 倍、経済規模（GNI）で 3 倍以上も大きい日本よりも、市場規模では、約 4 倍も大きいことになる。

この市場を後押ししているのが、韓国の人々の伝統医薬品への信奉であることはいうまでもない。そして、韓国でもっとも人気の高い生薬は高麗人蔘（人蔘）であり、伝統医薬品においても同様のことがいえる。まさに「地上の一植物として最高霊薬」［今村 1971a:1］である。KBS ニュース（2017 年 5 月 14 日付）によれば、2015 年における人蔘類・人蔘製品類の市場規模は日本円に換算して約 1242 億円規模である。高麗人蔘の 1 品目だけで、先ほどの伝統医薬品の市場規模と照らし合わせて約 25% を占めており、市場規模は年々拡大している。

このように韓国社会で大きな関心を集め、多大な影響力をもつ高麗人蔘であるが、これまで研究レベルでは臨床実験をともなった薬効研究や新薬開発を念頭に置いた薬理学的な研究、農学分野では栽培技術や病虫害対策など、時代によって多少の変化はあっても、偏った分野で着目されてきた。人蔘関係の学会組織や学会誌としては、高麗人蔘学会（1970 年創設）や高麗人蔘研究所刊行の学会誌や論集があるが、大半が技術分野の研究である。それ以外に個別の問題関心として挙がったのは、人蔘製品開発や各地で開催される人蔘関連のイベント観光効果などにすぎない。

日本統治期に専売局や開城人蔘同業組合などから刊行された資料も貴重なデータであるが、栽培方法を扱った資料が多い。人蔘を総合的に扱ったのは、植民地期に刊行された『人蔘史』全 7 巻（今村鞆 1940）や『韓国人蔘史』（上・下）（韓国人蔘耕作組合連合会 1980）などが代表的であるが、百科事典的役割で、『文化遺産としての錦山曲蔘』（金順基 1998）も同様である。日本で刊行した『日本人蔘史』（日本人蔘販売農業協同組合連合会 1968）や『朝鮮人参秘史』（川島祐次 1993）などには、人蔘を多様な角度から分析する試みはみられるが、あくまでも日本国内の事例を文献中心に紹介したもので海外事情は概略にとどまる。

近年も刊行物が数冊でているが、霊薬としての人蔘の優秀性を説く啓蒙書のほか、国内外マーケティングや料理書、観光学分野の成果が目を引く程度で、人蔘に携わる人々の生活やその地域社会全体に対する分析を行うものではなかった。

一方、興味深いところでは、韓国人蔘公社が刊行した社史『7 年史 1999-2006』（2007）や開城人蔘協業協同組合が刊行した組合史『開城人蔘農協 100 年史』（2010）などが挙げられる。これら人蔘に携わってきた組織の歴史などは、契約農家や関連業者の動向を知る上で大いに参考できよう。

ただ、人蔘が韓国社会で関心事であり続けてきたのにもかかわらず、人蔘を文化的な側面から捉えた研究は稀少で、人蔘と社会との関係性を明らかにしようとする先行研究はみられなかった。単に人蔘という植物のみに関心が向けられてきたといえる。

しかし、今日の東洋医学に対する人気の高まりやブーム、人蔘産業の発展を韓国社会の現象として捉えるとき、東

洋医学、とくに高麗人蔘をめぐって、医薬分野・農学分野からのアプローチだけでは説明できない。人蔘がいくら薬効に優れているからといって万能ではないためである。一時期のデマのように、MERS や SARS、新型コロナに有効だといわれはしても［KBS News HP<2017 年 5 月 14 日付 >］、完全な治療薬とはならない。それでも人々が人蔘に魅了されてきた理由として、それが霊薬とあがめられているから、あるいはそれが病の治癒に効くとされているからが挙げられよう。つまり、プラシーボ効果（Placebo Effect）が根底にみられるのである。

そのように考えれば、ある意味で非科学的な魅力で人蔘が受容されてきたにもかかわらず、先行研究は人蔘の非科学的な側面を無視してきたともいえる。

そこで本稿では、他の漢方薬同様、霊薬と称される人蔘についてもプラシーボ効果が指摘される中、その効果が他地域と比較して優越性を語ることによって増強されていることを指摘し、それを「優越的プラシーボ効果」と呼ぶ。そして優越的プラシーボ効果の発動にあたって他地域と比較をする際、地産地消ともいえる「身土不二」の考え方が巧みにナショナリズムと結びつき、強く影響していることを指摘したい。

1. 韓国・朝鮮社会における東洋医学と高麗人蔘

1-1. 朝鮮社会における東洋医学の発展と定着

古来、朝鮮半島は霊薬とされた人蔘の産出地で、東洋医学への依存度が高かった。中華の影響を直接的に受けてきたことから、医療分野においても大きな影響を受け、独自に発展させてきた。

すでに三国時代（4 世紀頃 -668 年）には、新羅に『新羅法師方』、百済に『百済新集方』、高句麗に『高麗老師方』という医書があったとされ、針治療も行われていた。その後、高麗時代に入ると、中国の薬「唐薬」に対して、朝鮮の薬「郷薬」という概念が誕生し、1200 年代半ばまでに『郷薬救急方』が刊行されたとされる。その後、朝鮮時代に入ると、1433 年に『郷薬集成方』、1445 年に『医方類聚』、1613 年には医書として評価が高く、中国や日本まで広く流布したという『東医宝鑑』が刊行される。朝鮮時代（1392-1910）の後期に刊行された『舎岩道人針灸要訣』は朝鮮を代表する鍼灸書である。

また漢方医としても、『東医宝鑑』を編纂した許浚（1539-1615）、『舎岩道人針灸要訣』を編纂した舎岩道人（生没不詳、朝鮮後期）、四象医学を提唱した李済馬（1837-1900）など、多くの名医を輩出している。

朝鮮時代には、医療施設としても宮中・官庁に内医院や典医監が置かれた一方、庶民に対しては恵民署や活人署といった施設が設けられ、東洋医学的な治療が行われていた。また同時に、施設に通えない庶民たちの間では手近な薬草を用いた民間療法が試みられるなど、病の治癒に東洋医学的な考え方が浸透していた。それは現在の韓国社会に通じる薬食同源[1]を基本とする食養生が理想とされた考え方でもあった。

1-2. 韓国・朝鮮社会と高麗人蔘

その薬材の中でも、もっとも上位に位置するのが人蔘で、とくに野生の人蔘（山蔘）はその貴重さから、交易品としての需要も高く、中国や日本など、周辺地域にも多大な影響力を有していた。ただ、庶民にとっては高嶺の花で、その代用品で我慢するしかなかった。たとえば、今村鞆『人蔘史』には、入手が困難であった清国では、菊花蔘、金雀馬尾蔘、建人蔘、象牙蔘、獅頭蔘など、日本では大横人蔘、桔梗人蔘、清正人蔘、白根人蔘、牡丹人蔘など、現在では品種が不確かなものまで含み、多くの野草が人蔘疑似品として紹介されており、それは朝鮮国内でも同様であったと考えられる。また、それ以外にも疑似品としてだけでなく、人蔘と合わせて五蔘とされる薬草の中でも、山野で入手が可能であった紫蔘（ハルノトラノオ）[2]、丹蔘（タンジン）、沙蔘（ツリガネニンジン）、玄蔘（ゴマノハグサ）は、民間薬としても重宝されたと考える。加えて、薬草として現代でもよく用いられる苦蔘（クララ）や蔓人蔘（ツルニンジン）など薬効の高い薬草が庶民の間でも知られていたと考えられる。

一方、人蔘は五加皮やウド（独活）を含むウコギ科（Araliaceae）の植物で、日本では高麗人蔘、朝鮮人蔘・御種人蔘ともいわれる。朝鮮や中国のみならず、日本でも古来、霊薬として重宝されており、江戸時代には高価な人蔘を病身の親に与えるために娘が身売りをしたという川柳が詠まれるほどで［今村 1971b:70］、実際に遊里に売られる悲

劇が絶えなかったことがその背景に挙げられる［今村 1971b:68］。江戸中期などには、先の人蔘疑似品が多く日本国内にでまわったと考えられ、薬屋の中には不正品を高値で売りつけるようなことも起きた［今村 1971b:70］。甚だしくは、人蔘が媚薬として用いられたり、人間以外の動物（牛馬、鷹など）に対する薬として用いられたりもした［今村 1971b:223-301］。

学名はパナックス・ジンセン（Panax ginseng）で、韓国では「インサム（人蔘）」、中国では「レンシェン（人蔘）」と呼ぶ。しかし、日本において同音で呼ぶニンジン（Carrot）は、セリ科（Apiaceae）の植物で、パナックス・ジンセン（人蔘種）とはまったく異なる。同種の人蔘種には、中国・雲南省の田七（三七）人蔘や日本の竹節（栃葉）人蔘、北米の花旗（西洋）人蔘、シベリアのヒマラヤ人蔘などがあるとされるが、高麗人蔘は他種と比べて効能が高いという研究成果が韓国から多数報告されている。

文献上、人蔘が最初に登場したのは前漢の元帝時代（BC48-33）に史游が「蔘」として載せた『急就章』といわれ、紀元前にまでさかのぼる［カン 2009:7］。その後は、AD100 年頃に刊行されたとされる『神農本草経』や張仲景による『傷寒論』などにも、上質の生薬としての人蔘や、その処方が紹介されている。

朝鮮半島における人蔘の歴史は文献上では定かでないが、中国で自生する地域が吉林省とかぎられていることから、先の医書が記される頃には人蔘の流通があったと推測される。ただし、朝貢品として中国に多く取引されるようになったのは三国時代といい、高麗時代には宋と頻繁な取引がされたとされる［カン 2009:9］。739 年には、高句麗にかわって朝鮮半島の北部に勢力を誇っていた渤海から日本に人蔘がもたらされたことからも［川島 1993:18］、すでに 8 世紀には人蔘が進上品として珍重されていたことがわかる。1500 年代に編まれた『本草綱目』には、高麗の者（高麗蔘）、百済の者（百済蔘）などの記述があり、地域による人蔘の区別まであったことがうかがい知れる。

今日、朝鮮半島内の有名な産地としては、開城、江華、豊基、錦山があげられる。このうち開城産は高麗蔘といわれ、その流れを受けて栽培されたのが江華地域であった。同様に豊基産を新羅蔘とすれば、百済蔘とされたのが錦山の人蔘であった。しかし、今日的には、たとえば坡州や金浦、鎮安や茂朱といった主産地の近隣地域に栽培が拡大していったほか、旧来からの産地である陰城や槐山といった地域でも栽培が盛んになり、各地で売りだされている。ただ、錦山では人蔘市場が早く確立したことから、今日では韓国内に流通する人蔘の約 7-8 割がここを通過するといわれている。

2. 人蔘の薬効と人蔘にまつわる伝説・神話

2-1. 人蔘の薬効

人蔘が人蔘種同士で優劣を競うときの 1 つの基準が有効成分のサポニン（Saponin）の含有量で、中でもジンセノサイド（Ginsenosides）が注目される。最初に発見されたのは、1954 年のことで、フィラデルフィアの S. ガリークスがアメリカ人蔘を分析する過程で、パナキロン（Panaquilon）と命名したことが始まりとされる［川島 1993:316］。このパナキロンは現在でいうサポニンと総称されるものに含まれる成分であるが、これが学名のパナックス（Panax）の由来となっている。

人蔘内に含まれた有効成分であるサポニン、とくにはジンセノサイドと呼ばれるサポニンの種類と含有量で人蔘の優秀性が決定されるという。そして、韓国人蔘公社のブランドである正官庄 ONLINE SHOP によれば、日本産はジンセノサイド 8 種類、中国産は 14 種類、花旗人蔘（アメリカ人蔘）は 19 種類で、三七人蔘は 29 種類に対し、韓国産は 38 種類に及ぶという。加えて、その他の有効成分であるポリアセチレン含有量も花旗人蔘が 0.064%、三七人蔘が 0.075% に対して、韓国産は 0.089%、酸性多糖体も花旗人蔘が 2.09%、三七人蔘が 2.25% であるのに対し、韓国産は 3.16% も含まれているという。

2-2. 人蔘にまつわる伝説・神話

これらの薬効を高める作用をしているのが、人蔘にまつわる言い伝え、伝説や神話である。伝説には数々の力を得たり、不治の病を治したりする類のものが多く、神話には山神や仙人といった人間の能力を超えた存在が登場する。

たとえば、超人的な力を得る話としては、江原道で山蔘を偶然に掘り当てた男にでくわした京城（ソウル）の男が、その山蔘を盗み食べるとみるみるうちに筋骨隆々になったという話［今村 1971c:30-32］や、開城でも山蔘を掘り当てた男が、それを押収しようとした兵士に取りあげられる前に、自分で食べたところ金剛力を得るところとなり、兵士ほか手がだせずに立ち去った話が記されている［今村 1971c:32-33］。黄海道北部の村で、素行不良で奥山に捨てられた男が飢えに苦しんで草の根を掘って食べたところ、山蔘が含まれていたために 3-4 ヶ月を経過して無事に麓まで降りてきた話［今村 1971c:75-76］もある。

山神や仙人が山蔘を授けた話としては、咸鏡南道長津郡で山神が白髪の老人姿ででてきて善良な親子の子に人蔘畑を教える話［今村 1971c:42-44］、江原道江陵郡に住む孝心深い子に対して夜中に夢に神が現れて霊草の場所を教える話［今村 1971c:47］、もともとは特権階層の両班であったが、没落して長湍郡の田舎に移り住んだ家系に生まれた孝行娘の夢に白髪の老人が現れて山蔘の在処を教える話などがある［今村 1971c:48-49］。

山神以外に、神獣が山蔘を採る手助けをする話もある。山蔘を採取していて窮地に陥った山蔘採りを大蛇が助けた話［今村 1971c:52-55］、猟師に追われた鹿に請われて助けてやった恩返しに山蔘の在処を教えた話［今村 1971c:67-68］などがある。

逆に、山蔘の神聖さを示した話としては、全羅南道麗水郡に住む親孝行で善良な青年に授けられた山蔘を横取りした隣家の主人が失明した話［今村 1971c:56-57］が挙げられる。そのほか、山神である白衣の老人が夢にでてきて老婆に山蔘の在処を教えたにもかかわらず、手荒に掘ったために山神が怒って山蔘が消え去り、老婆が天罰を受けて死んだ話［今村 1971c:69］も紹介されている。

人蔘の優れた薬効については、多くの研究成果が発表されている一方で、他の人蔘種と比較して高麗人蔘の優秀性とともに、韓国産の優秀性が説かれる。その韓国産の効力を誇示するのに、多くの言い伝えが役立っている。

3. 人蔘をめぐる現代的な風説とプラシーボ効果

以上のように、人蔘本来の薬効に加えて、古来、伝説や神話がその付加価値を高めてきた。それにともない、現代においても人蔘をめぐって多くの風説が流れている。いうまでもなく、これらの風説は効能と無関係であるが、韓国における健康ブームを下支えしてきたことに違いない。

3-1. 人蔘をめぐる現代的な風説

人蔘にまつわる風説は現代でも多く、風説とすら気づかずに受け入れている状況も多くみられる。とくに人蔘が高価で、人々の手に届かなかった時代に生みだされ、社会に流布していった。

たとえば、人蔘はときに産地ごとの違いで薬効の善し悪しを比べることがあるが、もっと重要なことは個体ごとの生育環境で、同じ畑であっても、陽当たりや水はけ、土壌の状態、畑の中の場所で異なってくることである。窪地に近い場所で水はけが悪いとすぐに根腐れを起こしたり、遮光幕が少しはがれているだけで葉が焼けたりしてしまう。支柱木の微妙な高さで、病害を受けたり、黄あざができたりする。産地ごとの環境の差や気温の差よりも、1 本 1 本の人蔘がおかれた状況が生育状況を決定するといえる。

また人蔘は年数が重視されることが多く、一般的に 4 年物よりも 6 年物がより薬効が高いといわれている。しかし、年数ごとにどこまで効能が変化するかについては先のような理由もあって明確でない。また金順基［1998:87］によれば、人蔘は通常、4 年物から 6 年物までのものを採取して使用するが、サポニンの含有量は何年物によって大きく増加したり、減少したりする証拠を探すことはできないという。同様なことは、2010 年当時、忠清北道陰城にある農村振興庁人蔘特作部（現国立園芸特作科学院人蔘特作部）研究員 K が、「実のところ、何年物で差はないと思われる。大きさによって含有量は変わるかもしれない」と語ったことと類似する。

近年、畑で育てて山に植え替えた人蔘である山養蔘をよく目にする。畑だけで生育した人蔘よりも効能があるといわれ、研究機関で成果はだされるが、これも個体差が大きいため、どの個体を採取したかで含有成分や薬効も異なってくる。結果、「山養蔘は人蔘よりも薬効成分に優れている」と繰り返されるだけで、それ以前の栽培状況について

問われることはない。ちなみに、山養蔘は山に植え替えて5年以上が経てば、認められるので、7年物から12年物が多くでまわる山養蔘には2年ほど畑で育てて移し替えたものが少なくない。

人蔘の服用法もさまざまで、たとえば健康食品店や漢方薬局でよく販売されている「紅蔘液」は紅蔘を圧力釜で煎じ詰めたものであるが、その製法に関して統一したものはない。人蔘の一大集散地である錦山でも、1パックの値段と分量は各店舗で変わらないが、そこに使用される紅蔘の量や煎じる温度・時間は異なっている。製法や有効な加熱温度などは、研究機関から一定の研究成果が公表されても、業者の経験や同業者間で交換された情報が優先され、とくにそれに従われるわけではない。加えて、専門的に薬理学を学んだ業者もいるが、健康食品店の場合、扱いについて国家資格が必要でなく、多くの店舗では経験知にたよっている。

これらのことに対し、消費者側も研究成果を意識したり、それらを問い合わせたりすることもなく、業者との間の信頼関係で購入し、服用している。要は、「もっともらしいことをいう目前の業者がいうのだから信頼できる」と、勝手に効能を信じているに過ぎない。

人蔘を蒸すことで薬効を高めた紅蔘をさらに蒸した黒蔘にしても、製造過程で炭化しただけで効果を疑問視する見解も多い。同様に消化吸収力を高めるために紅蔘を発酵させた発酵紅蔘にしても、紅蔘に発酵はそぐわないという見解もある。これらの製品を扱う側もデータを挙げて効果を主張しているが、その結果を懐疑的にみる業者が多い。

効果については、いくつも「賞賛の声」が紹介される一方で、副作用も認められる。浜松医科大学名誉教授の高田明和［2009:230］によれば、高麗人蔘については、「男性の性機能を昂進させるとともに、女性の性的障害を改善させる効果も報告されている」といい、「アルツハイマー病の認知力の改善や、風邪やインフルエンザに対する作用も認められており、免疫力への作用が期待される」。ただし、同時に副作用についても指摘されており、血行がよくなりすぎるため、服用者が高血圧の場合、「血圧が上昇し、動悸が激しくなり、ひどい場合には心臓発作とか脳出血を起こす可能性」［高田 2009:234-235］があるという。冒頭に挙げたMERSやSARSへの効果についても冷静にみる必要があろう。

そのほか、ある高麗人蔘栽培者も、胃がんで胃を少し摘出したため、当分は高麗人蔘を服用しないという。高麗人蔘は消化しにくいため、胃が健康な状態でないと充分に吸収できずにかえって不適応を起こすといい、万能薬という風説に懐疑的であった。

3-2. 漢方薬とプラシーボ効果

人蔘にまつわる風説がでまわっていることと関連し、韓国人蔘学会理事を務めた経験があり、韓国中部に位置する錦山郡で初めての製薬会社を創設した金順基によれば、漢方薬はすべてプラシーボ効果にたよっていることを指摘する。プラシーボ効果とは、一般に「偽薬効果」といわれるもので、治癒的な効果や薬理作用がない物質または治療法とされる。逆に、薬理作用がある物質を服用しても、効果を信じないことで症状が回復しないことをノーシーボ効果（nocebo effect）と呼ぶ。金順基曰く、人蔘の場合も、飲めば治ると信じて飲むから治るだけで、副作用もみられる人蔘が万能薬として流通する現状は、人々の健康によい影響を及ぼさないという。人蔘の副作用を指摘しないのは韓国だけで、日米の医書には明確に記されていると指摘する。

また文化人類学者の西村朝日太郎［1981:8］は医学博士ヘンリー・ビーチャーの言葉を借りて、薬剤の医学的効果の平均35％は気休めによるもので、薬物の有効性の60％は有効成分によるのではなく、投薬の行為それ自体によるという。「期待と希望をもつことのできる患者に、プラシーボはその効果をもたらす」［広瀬 2001:74］のであり、逆に「‘薬が効かない人がいる’という情報こそが、薬を効かなくしている」［高田 2009:45］のである。

また心理学者の広瀬弘忠［2001:151-152］は、医学者の高橋晄正が、漢方は「偉大なる幻想」の可能性があるといい、信頼できる科学的評価を受けなければ、漢方医学は「伝承仮説」にすぎないといったことを紹介している。そして、医学の専門家から猛烈な反撃を受けると前置きしながら、「信仰に病気を治す力があったり、病気を予防する力がある」ことを指摘する［広瀬 2001:179］。

もちろん人蔘に効果がないわけではなく、二重盲検によって効果が確認されてはいる。しかし、検査データの差が決定的といえるのかはわからない。人蔘が神秘な霊薬で、付加価値がつくだけに風説が多くでまわり、人々が風説を

信じて服用していたといえる。人蔘独自の薬効以外に、神秘性があるからこそ人々が効果を期待し、プラシーボ効果によって病を克服してきた側面も無視できない。

これが果たして西洋薬のように、薬理作用が明示されていたら、ここまで人々が人蔘に取りつかれただろうか。ある研究者は、韓国内の人蔘研究センターが共同で、人蔘の年数による効果や産地の差にまつわる真偽をはっきりさせたいと語ったが、もし、それをすれば、神秘性を失った人蔘に対する興味が薄れるか、効果の現れた一部の人蔘だけに関心が集まり、人蔘産業自体は衰退し、健康ブームが過ぎ去る可能性もある。

先述した人蔘の加工品である黒蔘や発酵紅蔘は紅蔘よりも高価でありながら、これからも需要があると考えている。健康ブームが衰退しないかぎり、人々は健康への投資を怠らないと業者側が考えているからである。そして、徐々に購買層が拡大していくことで紅蔘同様に値段が下がると見込んでいる。

ここで重要なことは、黒蔘や発酵紅蔘はいうまでもなく、人蔘や各種生薬に、まだ科学的に解明されていない成分が存在する可能性が残っていることである。そのことは人蔘を信じる人々の拠り所となり、プラシーボ効果で「奇跡」が引き起こされることにつながる。人々が人蔘に取り憑かれる根拠はプラシーボ効果にあるといえる。

4.「身土不二」からみた人蔘

人蔘とプラシーボ効果の関係に加えて、韓国社会では、韓国産の優秀性の語り口と韓国農協中央会が掲げる「身土不二」の考え方は密接につながっているように思われる。そこでまず初めに、身土不二について説明を加えたい。

ここで身土不二とは、土地（土）とそこに生まれ育った人間の体（身）とは不可分で、住むところの３里四方[3)]、もしくは４里四方で生産された旬のものを食べ、暮らすことで健康が保てるという考え方である［山下 1998:14］。身土不二とは、もともとは浄土（土）と仏の身あるいは衆生の身（身）は不二一体の関係にあるという仏教用語であった。つまりは「身体をもって生きる衆生という存在は、それを支える大地から切り離して考えることはできない」［山野 2007:18］という考えで、ここで「衆生という存在」は「身」であり、「大地」である環境世界（浄土）、すなわち「土」は「不二一体」の関係にあるという。

この身土不二を食養道運動に使用し始めたのは陸軍大佐の西端学であった［山野 2007:18-19；櫻澤 1994: 序文，120］。西端学は、陸軍薬剤官であった石塚左玄による、完全なる人間をつくるための正しく摂取し、生を養うための食養道運動に傾倒し［櫻澤 1994:51］、そこに不二一体の論理を持ち込んだのである。「身」を人間の身体や健康、「土」を土壌や地元で育った農作物（穀物、野菜、山菜など）と置き換え、「地産地消」「地域自給」とも類似した考えで、人間の身体・健康（身）と地元産出の食料（土）との密接不離の原則、「身土不二の原則」と名づけたというのである［山下 1998:14］。

ところが、アジア農民交流センター代表も務めた山下惣一［1998:110］が紹介するところによれば、さらに、この身土不二が韓国に導入された。導入したのは韓国農協中央会会長を務めた韓灝鮮（ハン・ホソン：1936-）である。日本の有機農業の草分けとして知られる荷見武敬の著書『協同組合地域社会への道』（家の光協会、1984 年）を翻訳して韓国に紹介する過程で身土不二に出会い、これをスローガンに用いたという。

現在も農協のロゴマークでみかける身土不二は、国産作物の品質の確かさを表示するもので、1986 年に始まるGATT ウルグアイラウンドから注目された。農産物の自由化に向けた議論の中、韓国農協中央会がスローガンとして掲げた「身土不二」が声高に叫ばれ、1993 年には歌手ペ・イルホが歌謡曲『身土不二』を発表するや、大ヒットとなった。海外から廉価な農作物が流入するようになるため、その脅威に対抗し、韓国内の農家を守る団結の旗印になったともいえる。

しかし、韓国において、この考え方は次第にナショナリズムと結びついていった。身土不二は、本来は仏教用語であったし、ナショナリズムの片鱗はみえない。ところが、「土」が「自国」にすり替えられることによって、急激にナショナリズム化していく。そのきっかけとなったのが、先述のGATT ウルグアイラウンドであった。自国の農家を守るための運動が、自国のものはよい、それは身土不二だからという論理になっていく。米も野菜も、すべて身土不二となり、外国産を排除する動きへと変化した。

人蔘しかりである。本来は、同一種なので薬効に優劣がないと思われるが、いくつかの産地によって薬効が異なるとされてきた。人蔘にも各地域で呼ばれ方が異なり、区別されてきたことがあった。たとえば、『人蔘史 第7巻』では、人蔘各種が紹介されているが、大分類としての京畿道北部の開城を中心とする地域で産出される高麗蔘、慶尚北道の豊基を中心とする地域で産出される新羅蔘、忠清南道・錦山を中心とする地域で産出される百済蔘のほか、江原道で産出される関東蔘、咸鏡道で産出される北蔘、全羅道で産出される羅蔘など、地域ごとに人蔘が細分化されている。これに加えて興味深いのが同福人蔘で、全羅南道和順郡同福面で産出される人蔘である。濫觴地としての伝説を有し、品質もよく、長期のものを採取するので開城産の3倍以上も高値がついたという［今村 1971d:403-404］。

前節で述べたとおり、産地よりも生育状況に薬効は左右されがちであるにもかかわらず、たとえば江華では海風が吹き、それが人蔘の生育環境を厳しくするといい、そのために江華で育った人蔘は薬用成分が一番高いのだという。また、豊基は豊基で、山から吹き下ろす風が人蔘の生育環境を厳しくし、それが人蔘の薬用成分を高めるという。一方、坡州では朝鮮半島で良質な人蔘を多く算出したとされる開城地域と地続きで、土壌に恵まれていることが坡州人蔘の優れたところという。錦山人蔘の場合は、伝説の地である進楽山を高い山が取り囲む盆地の形状をし、その中を錦江が流れることで湿度が適当に保たれ、また寒暖の差があるため、人蔘生育にまたとない条件をもっているという。

品種としてはパナックス・ジンセン・マイヤー（Panax ginseng C.A.Meyer）の1種であるにもかかわらず、地域ごとに薬効が異なり、韓国産が最高とされる。しかし、その韓国産の中でも各ブランドに分かれており、それぞれに最高の高麗人蔘と主張している。どれほど効能が優れているかについては前節の冒頭で説明したとおりである。

5. 身土不二が生みだす優越的プラシーボ効果

以上のように、韓国社会において身土不二は人蔘とも密接にかかわっているが、本来の意味を考えると、身土不二の用いられ方に矛盾がみられる。自分が生まれ育った場所から4里四方で生産されたものが健康を保つのであれば、個々それぞれに身土不二が存在し、他よりも国産がよいという論理は、身土不二の本来の思想と矛盾する。

つまり、身土不二とナショナリズムは必ずしも合致しないのである。「自らが生まれ育った土地」のものを大切に思い、食養を続けていく意味では近似しているが、「土」の範囲が問題となる。つまり、身土不二が土地として認める範囲は、広くて16km四方であり、国家の単位ではない。身土不二は、決してナショナルなものになり得ない概念といえる。

ましてや高麗人蔘は同じ畑の中でも山際か道路脇か、水の通路となる谷筋か尾根筋かで、生育状態がまったく異なってくる。病害虫にも弱く、陽光に当たるだけで黄変も起こる。そのように考えると、各地で人蔘の成分データが取られているが、それはあくまでも調査者にとって都合のよい個体である可能性が高く、必ずしもその地方で収穫された人蔘を代表したとはいえない。産地によってサポニンの含有量に差があるという証拠もないという見解もある［金順基 1998:87］。いわゆる地方版の「身土不二」がみられるのである。

韓国内の先の産地同士でもこの数値が競われるが、種子は各地で変わらないため、産地の気候や地形で、効能や優秀性が語られることになる。新羅蔘、高麗蔘、百済蔘といった分類よりも細かな分類で、ブランド化が進む。その地域ごとに人蔘発祥にまつわる伝説があり、それが各人蔘に神秘性と正統性を与え、商品価値を一層高めている。百済蔘の系統を引く錦山には、山神が人蔘を初めてもたらしたという伝説まで存在し、錦山産ブランドの価値を高めるのに一役買った。

もちろん、山神が孝行娘や孝行息子に授けた伝説は、錦山のみならず各地に存在する。たとえば、先の今村［1939:46-47］も、黄海道安岳郡、咸鏡南道利原郡、江原道の一部、全羅南道潭陽郡、開城地域などで似たような伝承があることを紹介している。人蔘が人間に化けてでてきた伝承［今村 1939:35-37, 39-41］や、仙人が人蔘を授けたという伝承［今村 1939:42-44, 47-49］も複数箇所でみられる。これらは人蔘の効能を誇示するためであるが、このような伝承が各地に存在すること自体、その地域の人蔘に付加価値をつけようとするもので、いかに効能が高い人蔘が産出されるかを示そうとしたものといえる。

これに加えて、国家レベルでは韓国産が賞賛された。しかし、金順基［1998:56］によれば、高麗人蔘、アメリカ

人蔘、日本人蔘、三七人蔘、越南人蔘、ヒマラヤ人蔘などのように、パナックス（Panax）という学名をもつ植物は、高麗人蔘とほとんど似た成分と薬効を備えているという。たとえ、高麗人蔘がこれらよりも秀でているという結果を韓国の研究者が明らかにしたとしても、個体差によって薬効は大きく異なる。韓国産の高麗人蔘の優位性だけを語っても、実際の効力は心理効果の差だけといえなくもない。

さらに、通信販売業者による広告宣伝のデータでは、高麗人蔘よりも他の人蔘種の方がサポニンを多く含有しているという結果が示されている。このように、それぞれに広告宣伝する人蔘種の方が優秀と語る傾向がみられる。たとえば、ネットショップ「和漢の森」によれば、田七人蔘（三七人蔘）は、高麗人蔘の約７倍以上のサポニンが含まれていることを謳っているほか、株式会社ハイスコアの運営サイト「美白の乙女診断」によれば、有機田七は、日本食品分析センター調べで高麗人蔘 4.2 倍のサポニンを含有していると謳っている。

もちろん、確かなことは、科学者による公正で厳格な検査結果を待つしかないが、どの個体を扱うかによっても結果に違いはみられそうである。

以上のように、本来であれば産地によって大きな変化がみられない人蔘に対して、産地ごとに差別化が図られ、まことしやかに特殊性と優秀性が宣伝されることは、プラシーボ効果をさらに増幅させるのに寄与していると思われる。神話までも総動員した「優秀」という語りが風説となり、地域ごとの人蔘をより「神格化」し、心理的効果を高めたのである。さらに、このような意識は現代韓国の実情に沿って解釈された「身土不二」と結びつき、ナショナリズムと見事に結合していく。仏教用語から始まった身土不二は、地産地消的な意味を付与され、韓国に導入された後は、各地の人蔘の付加価値を高めたばかりか、「土」の範囲を国家にまで拡大し、韓国産の高麗人蔘をブランドに仕立てあげた。

本稿では、韓国で再解釈された「身土不二」を背景に、土地と結びついてその優秀性を信じることからくるプラシーボ効果のことを、「優越的プラシーボ効果」と呼びたい。人蔘は他の漢方薬と同様に、本来の薬効以外にプラシーボ効果にたよる側面もあったが、霊薬と崇められ、伝説や神話、現代的な風説が加味されることで、プラシーボ効果をますます高めていった。現代韓国社会において、この優越的プラシーボ効果が発動されることで、国家レベルでの韓国産の高麗人蔘の付加価値は、地域を超えて大いに高められたのである。

6. 終わりに

もともと金順基は、漢方薬には常にプラシーボ効果がつきまとうと指摘していた。東洋医学は患者が薬を服用し、効果を感じる際の自覚には自然回復効果と心理効果がともに混ざっているとの記述もある［金順基 1998:232］。同様に、今村鞆［1971b:68］も『人蔘史』の中で、ここにおいて特筆すべきは一般に人蔘を霊薬視する尊重心は、ほとんど迷信に近く、今日的にみて理解できないほど、高ぶっていることと述べている。これらはいうまでもなく、本来の薬効が世論によって影響を受けやすいことを意味している。

本稿では、現代韓国において、人蔘がこれほどまでに社会の関心事であり続けた背景に、これまでの心理的な効果をさらに増幅させるプラシーボ効果があったことを指摘した。その効果は韓国に導入された「身土不二」と結びつき、各地域を他地域よりも選ばれた地域として捉えたことから、本稿では「優越的プラシーボ効果」と名づけた。さらに、この優越性は地域の枠を超え、ナショナリズムの影響で再解釈され、韓国産の付加価値を高める上でも貢献したのである。

それでは、なぜ韓国では日本などと比べて、プラシーボ効果が効果的に作用したのだろうか。１つの説明として、それほどまでに韓国社会が効果を信じる土壌をもっていたといってよいのかもしれない。先述の金順基［1998:232］は、漢方薬への信奉については、韓国伝来の社会的風潮が存在すると指摘した。実際に、難病克服の声を信じて人々が傾倒していった。人々は、東洋医学に、西洋医学のような論理性を求めていないためともいえる。むしろ説明が付かないからこそ、そこに救いを求めるのである。それはまた、西洋医学から見放され、切り捨てられた人々がたよっていく最後の砦でもあった。

それでは、韓国・朝鮮社会の人々は、それほど「信じやすい」人たちなのだろうか。日本でも、「プチ風水」にた

よる若い女性は多い。そこに科学を土台とした明解さはなくとも、その明解さから切り捨てられた人々が依拠していく場所をプチ風水が与え続けてきたのかもしれない。これがもし「科学的」ならば、魅力は半減する。たとえば、食事療法や生活習慣にしても、さまざまな長寿方法がいわれるが、ここで科学的な研究成果が多くだされても、各個体に応じて差があることを人々は知っているため、それをすべて受容することなく、経験知に基づいた長寿方法を試していくことになる。それすらも、完全に科学で解明されたとき、人々の心はそこから離れ、ただ科学の結果だけを追従することになるのかもしれない。

そう考えたとき、プラシーボ効果を悪者とみなすことはできない。実際に、これまでも韓国における人蔘産業の繁栄から「健康を得た気分になる」ことの重要性を感じてきた。ある状況下で、「この気分」は最大の「効果」を発揮するからである。行き過ぎなければ、楽しんで健康になる 1 つの道であり、実はそれこそ人々にとって必要なことと思われる。

ある意味、人蔘への信仰が高まることで、健康ブームが過熱化した。それをつくりあげたのは、ドラマやメディア、そして経済力の高まりともいえるが、何よりもプラシーボやノーシーボがみられやすい土壌が韓国社会にあったとも考えられる。それらについては、今後、検討していくべき課題である。とくに人蔘の効果が伝えられると同時に、副作用もあるのに、その副作用が打ち消されるほど、効果ばかりが信じられる土壌がある。

それだけに本稿が批判され、でたらめと烙印されることは、むしろ人蔘の有効性が保護され、人蔘に期待する多くの人々に希望を持たせるものとなる。しかし、本稿がそれなりの成果として一定の賛同が得られるなら、これらの呪縛から人間が解き放たれるかもしれない。人々が自分の心身のあり方をコントロールできるようになることで、より多くの人々が健康でいられることを期待したい。

注

1）「医食同源」は新居によって創作された語である［新居 1987:15］。

2）五蔘に紫蔘を入れることには諸説あるようで、代わりに苦蔘を入れるほか、紫蔘自体をめぐってもアキノタムラソウやツクバネソウ、イブキトラノオ、チチノハグサするものもある。今村［1971d :212］も、人蔘とともに五蔘の 1 つといいながら、この名称があてられる植物は数種類あると指摘する。

3）この場合、1 里を 4km と計算しているが、周代の尺斤法（尺貫法）によれば 1 里は約 400m となり、1.6km 四方となる。

<< 参考文献 >>

新居裕久
1987『医は食にあり』時事通信社。
韓国人蔘史編纂委員会編
1980『韓国人蔘史（上・下巻)』韓国人蔘耕作組合連合会 < 韓国語 >。
広瀬弘忠
2001『心の潜在力 プラシーボ効果』朝日新聞社。
今村鞆
1971a『人蔘史 第 2 巻』思文閣。
1971b『人蔘史 第 5 巻』思文閣。
1971c『人蔘史 第 6 巻』思文閣。
1971d『人蔘史 第 7 巻』思文閣。
カン・ヒョンモ（강현모）
2009『説話を通してみた「人蔘」の話』錦山文化院 < 韓国語 >。
川島祐次
1993『朝鮮人参秘史』八坂書房。
金順基
1998『文化遺産としての錦山曲蔘』良書閣 < 韓国語 >。
金泰永

2010『開城人蔘農協 100 年史』開城人蔘農業協同組合 < 韓国語 >。
西村朝日太郎
1981「医学人類学 Medical Anthropology の視点よりみたプラシーボー効果」『民族学研究』46（1）、pp.1-17。
西脇真一
2012「中国・韓国現地リポート伝統医療はいま」『週刊エコノミスト』4241（2012 年 8 月 7 日号）、pp.24-25。
オク・スンジョン（옥순종）
2005『教養として読む人蔘話』イガソ（이가서）< 韓国語 >。
櫻澤如一
1994『石塚左玄 : 伝記・石塚左玄（伝記叢書 ,158）』大空社。
ソウル市政開発研究院編
2003『指標でみたソウルの変遷 主要統計と動向』ソウル市政開発研究院 < 韓国語 >。
高田明和
2009『誰も知らないサプリメントの真実』朝日新聞出版。
「日本人蔘史」編集委員会編
1968『日本人蔘史』日本人参販売農業協同組合連合会。
王初文・大原興太郎
2003「医食同源・薬食同源に関する歴史的考察 : 中国の古典を中心にして」『三重大学生物資源学部紀要』30、pp.69-87。
山野俊郎
2007「身土不二について : 中国天台の『維摩経』注釈書を通して」大谷大学佛教学会『佛教学セミナー』86、pp.17-31。
山下惣一
1998『身土不二の探究』創森社。
ユ・ヨンヒョ（유영효）
2010『ユ博士の人蔘話』本の木 < 韓国語 >。

<< インターネット資料 >>

美白の乙女診断「田七人参ランキング」
https://bihaku-otome.com/hikaku/kd/yss_2/（2020 年 12 月 20 日参照）
正官庄 ONLINE SHOP「高麗人参の主要成分 ジンセノサイド」
https://kgcshop.jp/html/saponin.html（2020 年 12 月 20 日参照）
KBS News HP（2017 年 5 月 14 日付）「MERS 影響で人蔘人気 ...2015 年出荷額 1 兆ウォン超えた」（메르스 영향으로 인삼 인기…2015 년 출하액 1 조원 넘었다）< 韓国語 >
http://news.kbs.co.kr/news/view.do?ncd=3480161&ref=A（2020 年 12 月 19 日参照）
村松慎一
2008「いまどきの漢方・これからの漢方」『自治医科大学地域医療オープンラボ』24、pp.1-2。
http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/letter24.pdf （2020 年 12 月 12 日参照）
和漢の森「白井田七」
https://www.wakan.shop/product/shiraidenshichi/（2020 年 12 月 20 日参照）

（はやし　ふみき　神田外語大学外国語学部・教授）